

ウシにまつわるお話

令和3年、西暦2021年が幕を開けた。昨年来得体の知れないウイルスが世界に蔓延し、人々を苦しめ、平穏な日常生活を破壊している。この後、本年が安寧であることを切に願っている。



図1 赤べこと金べこ すべて日本
(左から福島、福島、岩手) 昭和戦前 高12.5cm 他

さて、丑年が始まった。日本では「駿馬」に対して「鈍牛」と称されるように、ともに家畜として大切な働きをする両者でも、ウシはいささかスマートさに欠ける印象が強い。しかし、古来米作りを中心とする日本の農耕では、ウシは犁を引いて土地を耕す労働力の担い手として重要な役割を果たす動物だった。その証拠に全国各地に展開する郷土玩具でも多数登場し、その造形の多彩さは断然ウマを圧倒する。3俵の米俵を背中に積んだ「俵牛」、疱瘡除けや皮膚病治しの「撫牛」、東北地方の「赤べこ」などなどいずれも愛らしい。



図2 影絵劇トール・コンペヤータの人形「飾り牛」
インド 20世紀後半 長58.5cm

田畑を耕す労働力としての利用も始まる一方で、古代中国の殷では神に捧げる最高の生け贄だった。ヒンドゥー社会でもウシは神聖な動物で、こちらでも崇拝の対象になっている。人々は飢饉になっても決して牛肉を食することはない。牛を殺すのはバラモン僧を殺すことと同等の罪であるとされたからである。世界各地の影絵人形は細工の容易さから牛皮でつ

もともとウシと人間とのかかわりが遙か太古の昔にさかのぼることは、旧石器時代のアルタミラやラスコーの洞窟に描かれた野生のウシからも窺い知ることができる。中国では新石器時代(紀元前10,000～紀元前2,000年頃)の早い時期の遺跡から既にウシの骨が出土している。



図3 棺の底板「聖牛 アピス」
エジプト 紀元前7世紀-紀元前4世紀頃 長22.5cm

くられることがほとんどだが、インドでは代替品としてヤギの皮を用いたりもする。古代エジプトにはアピスという聖牛まで存在した。アピスは聖牛にふさわしく、「眉間に三角の白い斑点」「背中に有翼日輪の模様」があるなど、実に29もの特徴を持つ牡牛である。これらの特徴をすべて兼ね備えた牡牛など、とても存在したとは思えないが、古代ギリシアの歴史家ヘロドトスによると「(アピスは)きわめて長い間隔をおいてしか出現しない神で、あらわれたときはエジプトの全国民が歓喜して祝った」(『歴史』第3巻27節)そうである。生きている間は神殿で手厚く保護され、死ぬとミイラにされて王並みの豪華な葬儀が営まれ、さらに国全体が喪に服したというから世界一幸せな牛である。



図4 十二支文の鏡「亀紐鳳凰十二支文鏡」
重要美術品 中国 唐 7-8世紀頃 径12.6cm

りたために結果的にネズミが一番で到着。結局ウシは干支でトップになれませんでした、とは中国の故事である。この件でネズミにだまされて干支に入れなかったネコが、それ以来ネズミを追いかけ回すようになったのだと故事では続くが、ウシがネズミをその後も恨んだとは書かれていない。ウシは度量が広い。干支では中国で尊重されるトラより前に位置することからも、ウシが多方面で重要視されていることが窺える。広い大きな心でゆったりと対処し、しかし早めの準備で備えるというウシを範とした丑年にしたいものである。

〈図はすべて天理参考館蔵品〉